

特 116

337

農學博士佐藤寬次編

農藝新書
第貳拾參編

麥

東京

成美堂發行

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{18m} 1 2 3 4 5

始



行116
337

「農藝新書」編纂の要旨

- 一、本書は農業補習學校、青年夜學會、農事講習會等の教科書として編纂したるものなり。されど實地家の參考としても亦恰適せるを信ず。
- 二、本書の編纂上特に注意したる事項左の如し。
 イ 農村の現狀に鑑み、農事の技術、農家の經濟及び公民教育等に關し、最も重要と認むる事項につきて説述せり。
 ロ 農村及び農事の實狀は、地方に依りて著しく異なるを常とす。故に一冊子中に各種の事項を網羅するときは、或は不用なる章節を生じて、教授上其の不便少からず。是れ本書を、特に數十の小冊子に分ちたる所以なり。
 ハ 教授は須らく郷土を中心とせざるべからず。故に本書に於ては、郷土的事實の記入に便せんが爲、所々に空地を設け、以て從來に於ける此種教科書に通有なる缺點を補はんことを期したり。
- ニ 記述は平明を旨としたれども、一事項に關する説明は成るべく詳細ならんことに努めたり。是れ一は獨學自習に便し、一は實地家の參考に供せんとせしが爲なり。
- 三、本書は固より畛たる一冊子なりと雖も、孰れも皆獨立したる記事を以て成れるものなり。故に本書を教科書に供せんとせば、宜しく地方の事情に適切なるものを選択せらるべく、強て全部を使用するの要なかるべし。

大正四年十一月十日御即位の式

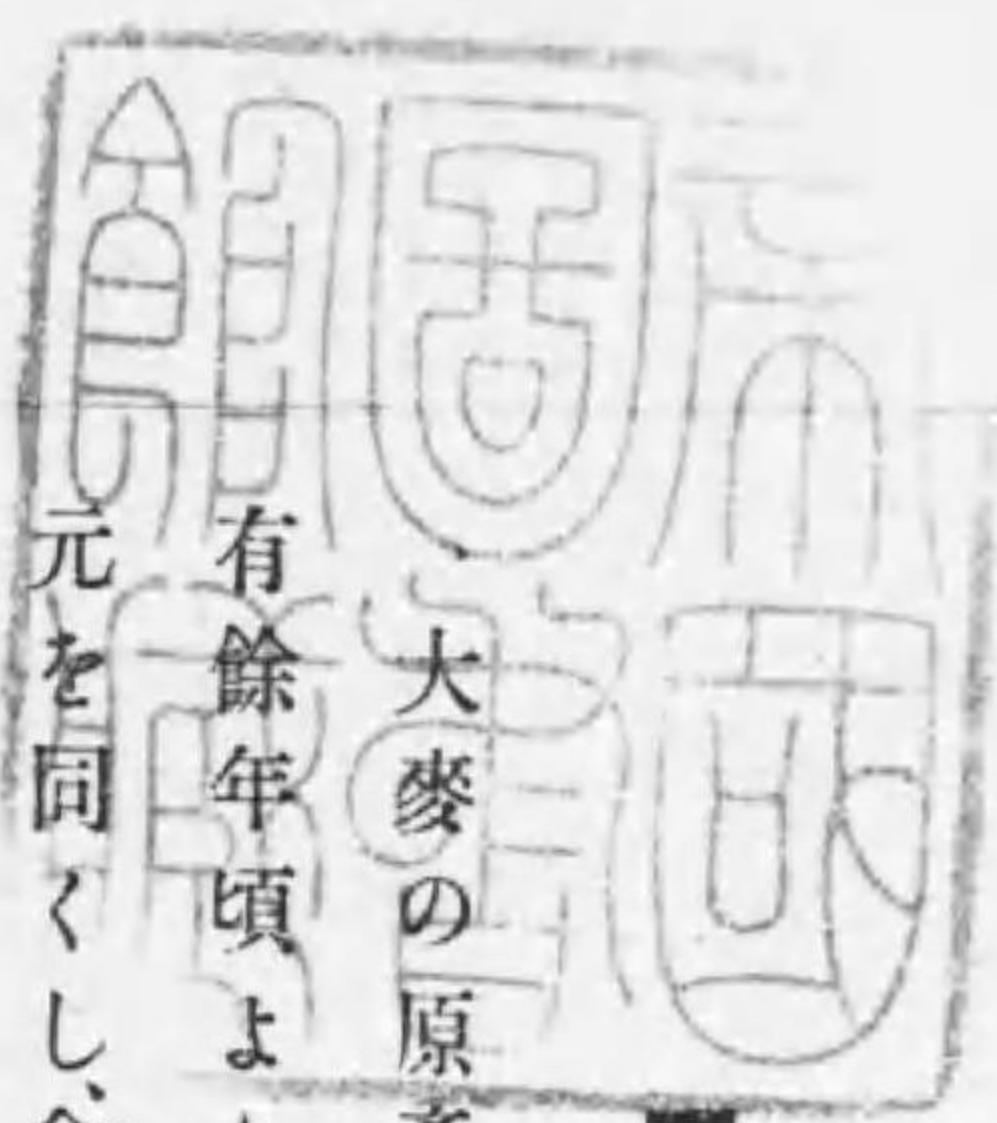
編者 議

大麥の目次

大麥の用途	一
性狀及び分類	二
品種	三
氣候土質	四
採種選種及び黑穗豫防法	五
整地	六
播種	七
移植	八
肥料	九
管理	一〇
病害	一一
虫害	一二
收穫及び調製	一三
小麥の用途	一四
性狀及び分類	一五
品種	一六
氣候土質	一七
栽培法	一八
病虫害	一九
收穫及び調製	二〇

大麥

大麥



大麥の原産地は西部亞細亞にして、歐洲にては西曆紀元前
 有餘年頃より栽培したる記録あり。本邦にては稻と其栽培の紀
 元を同じくし、食糧作物中稻に次ぎ重要なものにして、是が栽培も
 亦稻と等しく累年増加の趨勢にあり、特に近年食糧問題の宣傳せ
 らるゝや、稻作多收法の研究と同時に、大麥に就ても多收法の研究
 盛なるに至れり。吾人は尙一層之が栽培法を改良し食糧充實の
 策を講ぜざるべからず。近年本邦に於ける大麥の作付段別竝に

大正 12.4.24
 内交

大麥

收穫高は左表の如し

收量は皮麥の方多けれど、作付段別は裸麥の方大なり、而して十年度に於て一段歩の收量は平均皮麥は一石七斗にして裸麥は一石六升なり。

世界の小麦産額は約二億二千萬石にして産額の多きはカナダ北米合衆國・獨逸・露西亞・埃太利等なり。

年次	作付段別	收穫高
大正八年	〔皮麥〕	五三五・二七八町
	〔裸麥〕	六四六・三六一
同 九年	〔皮麥〕	五四一・三三〇
	〔裸麥〕	六七七・三七五
同 十年	〔皮麥〕	五二八・九四〇
	〔裸麥〕	六六六・二四一
		九〇二・八一七五
		七〇五・三六八一

裸麥は多く九州・四國・中國等に栽培せられ、關東地方にては多く皮麥を栽培す。裸麥の産額多きは兵庫・廣島・岡山・熊本・香川等の諸縣にして、皮麥の産額多きは埼玉・茨城・千葉・栃木・群馬等の諸縣なり。

二 用途

(イ) 大麥は米に混じて飯に炊ぐ、麥飯は滋養分に富みて消化し易く且脚氣病の豫防に効ありといふ。

食料品としては重且つ大にして蛋白質に富むを可とす。

麥酒醸造用としては豊肥にして皮薄く内容粉状にして、澱粉含量多きを可とす。

麥稈眞田の輸出高は年々數百萬圓なり。

(ロ) 飯の外、味噌・醬油等食料品の原料に供し、或は飼料となす、二條大麥は主として麥酒醸造に用ひらる。

(ハ) 麥稈は肥料・飼料・畜舎の敷藁等に用ひ、又燃料に供し、或は麥稈眞田・壘苞・俵・薦等に製す。

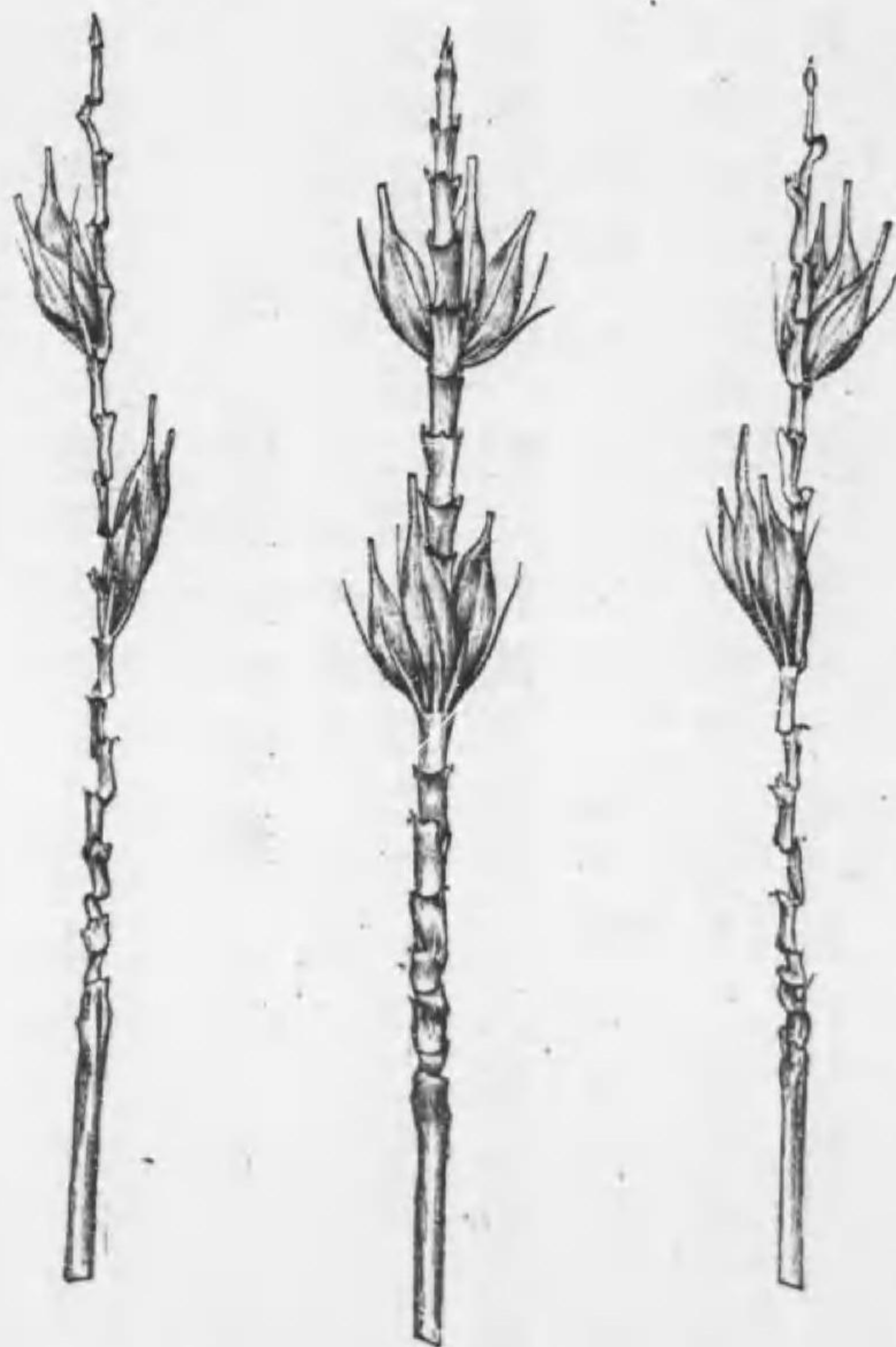
(ニ) 大麥麩は飼料及び肥料として用ひらる。

三 性狀及び分類

大麥は禾本科に屬し、秋播にすれば二年草となり、春播にすれば一年草となる。花は穂狀花をなし、三個宛の小穂花は相接して偏平なる中軸に互生すること第一圖の如し。一花は三雄蕊を有し、其の中央に一雌蕊あり、柱頭二分して羽毛狀を呈す。

大麥も亦稻と等しく芒の有無・熟期の早晚等により、有芒・無芒・早中晩種等に區別すれども、通常稈の離れ易きと否とによりて、普通大

第一圖
大麥の穂軸及子實
着生の狀

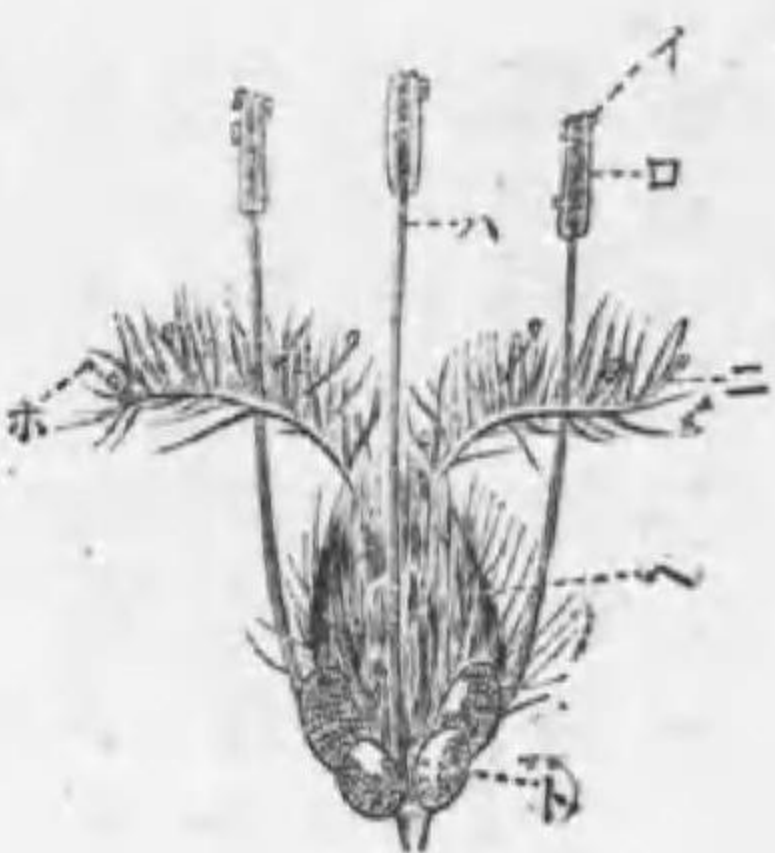


六角形に見ゆ、此種の穂は一般に短くして一寸乃至二寸あり、一條の粒列は十粒乃至十四粒とす。四條種も亦六條の粒列をなせども、穂の横断面は四角形に見ゆ、穂の長さは二寸乃至三寸あり、一條

四
麥(皮麥)と裸麥
とに大別し、更
に穂の形狀に
よりて六條麥、
四條麥及び二
條麥の三種に
分類す。六條
種の穂は縦に
六條の粒列を
なし、横断面は

第二圖
大麥の花

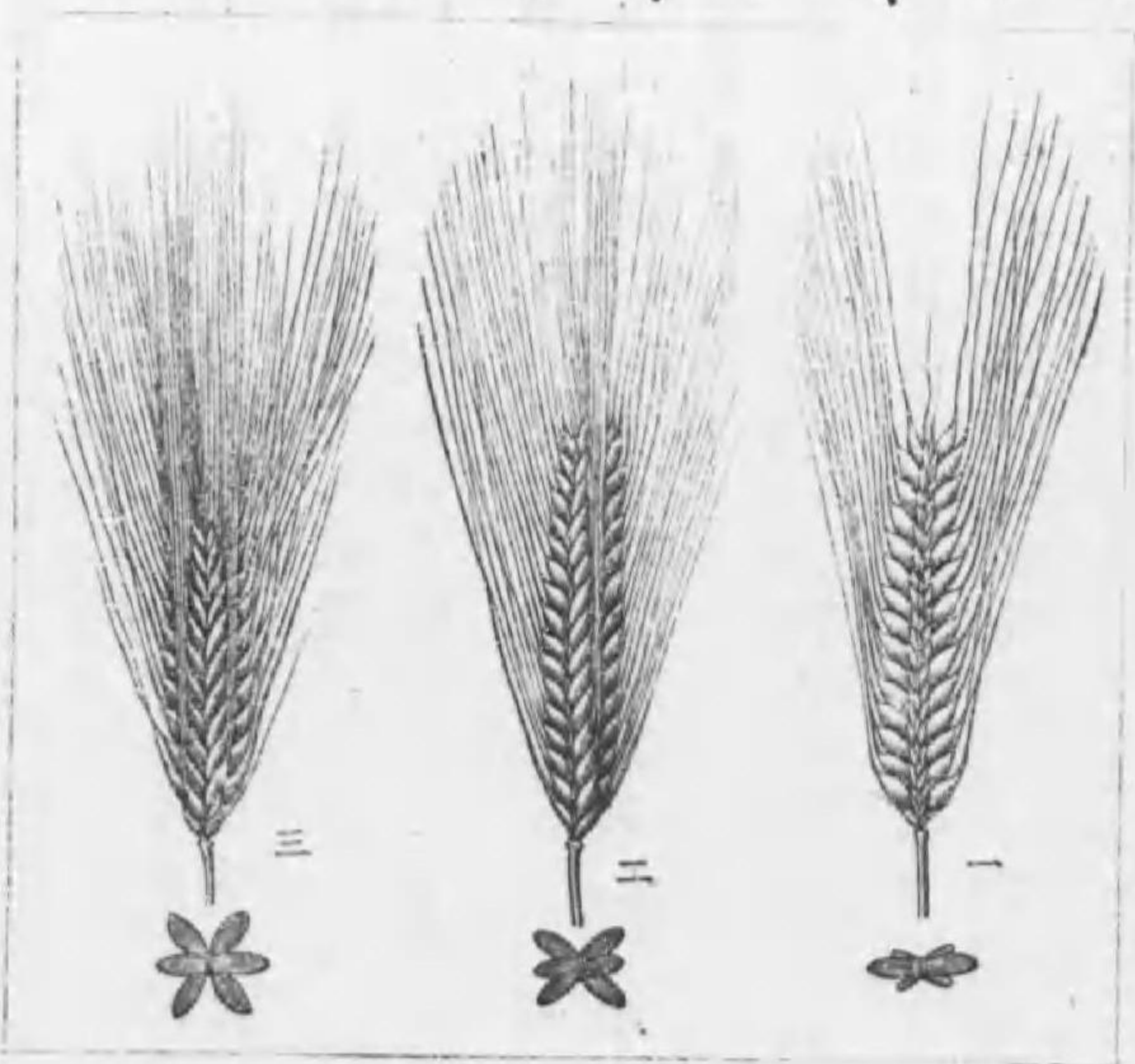
イ、花粉
ロ、葯
ハ、花糸
ニ、柱頭
ホ、花粉
ヘ、子房
ト、鱗被



の粒列は十二粒乃至十六粒あり。二條種は
三小穂花の
中央のもの
、み稔實し、
兩側のもの
は結實せず、

第三圖
一、二條大麥
二、四條大麥
三、六條大麥

穂の横断面は二條に見ゆ、其の長さは三寸内外にして、一條の粒列十五粒乃至十八粒あり、此種は一穂の粒數少きため各粒はよく稔實して大なり。



四 品 種

大麥には品種多くして數十種に及べり、我が國にては六條種の栽培せらるゝもの多く、四條種は之に次ぎ、二條種は最も少し。優良なる品種を擧ぐれば次の如し。

一、六條種

魁と稱する品種はこれと異名同種なり。

關取(皮麥) 埼玉、群馬、栃木等に盛に栽培せらるゝ早生、中芒種にして、莖稈短くして強く分蘖多く、子實よく充實し品質中等にし、收量頗る多し。

半芒(皮麥) 關東地方に栽培せらるゝ早生、短芒種にして、莖稈可なり強く、

丈高からず、分蘖多く、子實の品質中等、收量多し。

種揃良好なる故この名あり。

穂揃(皮麥) 東京府豊多摩郡の産、中生、中芒種にして、莖稈長からずして可なり強く、分蘖に富み子實の品質中等、豊産なり。

コピンカタギ(裸麥) 四國、中國地方に廣く栽培せらるゝ早生、中芒種にして、莖稈短くして強く分蘖に富み、品質中等、收量多くして栽培容易なり。

屋根稈 四國地方に栽培せらるゝ早生、中芒種にして、莖稈短くして可なり強く、子實は褐色を呈し品質中等、收量多し。

又は豊稔とも書く、愛媛縣越智郡村上豊次郎氏の選出せるもの。

豊年(裸麥) 早生、中芒種にして、莖稈の丈中等にして強く、子實の品質佳良

にして收量多し。

二、四條種

明治二十二年東京府荏原郡農務局試作地に試作せられしシユバリー種中より變生したるもの。

六角シユバリー(皮麥) 中生の長芒種なり、莖稈長くして強からず、品質中等にして收量多し。

春蒔の名あれど我邦内地にては秋蒔とするを可とす。

獨乙春蒔(皮麥) 中生の長芒種なり、莖稈大にして強からず、收量頗る多けれど、稈厚くして搗滅多し。

長州裸 長稈有芒にして、稔實すれば穂は少しく彎曲す。中國地方に多く産す。

米裸 長稈、長芒にしてよく分蘖し、粒着疎にして中粒なり。

三、二條種

此種は明治十四年初めて淡洲より駒場に移入し明治二十年頃より農商務省にて盛に奨励せるもの。

ゴールデンメロン(皮麥) 中生の長芒種にして分蘖力強く、莖稈長けれども強剛にして倒伏の虞少し、穂は初め直立するも、熟するに従ひ少しく垂下す、子實肥大にして皮薄く溝淺く、品質優良にして醸造用に適す。

白玉(裸麥) 中生、長芒種にして、莖稈長けれども可なり強く、穂の形狀ゴールデンメロンと同様にして子實大なり。

以上の外皮麥に五畝四石谷風備前早生竹林水晶珍好虎の尾ケ
プ(以上六條種)五斗麥奴(以上四條種)メーレン(二條種)等あり。裸麥
に鎌折廣島上州青(以上六條種)大粒裸香川(以上四條種)ネポール(二
條種)等あり。

五 氣候土質

大麥は其の栽培區域甚だ廣く、熱帶地方より寒帶地方に亘り、よ
く各地に於て栽培せらる。されど大麥の理想的氣候は冬間は寧
ろ寒くして適度に乾燥し草勢を徒長せしめず、春期は溫暖にして
時々相當の降雨あり、抽穂後より成熟期までは高温にして乾燥す
るを可とす。我が國は抽穂後に降雨多きを以て大麥の品質概し
て不良にして歐米産のものに劣る、即ち歐米の乾燥地に産する大
麥は澱粉含量多くして醸造用に適するも、我が國の大麥は蛋白質

大麥は全生育期間を
通じて平均攝氏十六
度位の温度を必要と
す。

酸性土壤を改良する
には適宜石灰草木灰
等を施して酸性を中
和すべし。

採種圃の種子は純系
分離をなせる原種を
用ふべし。

海水を利用して比重
液を製するも可なり。

に富むを以て食用には可なれども醸造用に適せず。

大麥は能く各種の土壤に於て栽培し得れども、就中最も適當なる
土壤は肥沃にして耕土深き砂質壤土又は壤土にして、而かも排水
良好なる所なりとす。又麥類は酸性には抵抗性弱きが故に酸性
土壤は之を改良せざるべからず。

六 採種・選種及び黑穗豫防法

採種 大麥も系統正しき確實なる種子を得んとせば、適當なる
場所に採種圃を設けて一粒播となし、管理に細密の注意を拂ひ、黃
熟期に刈取り、丁寧に乾燥調製すべし。

選種 種子は篩選唐箕選をなしたる後、左の比重液を製し鹽水
選を行ふこと稻に等し。

●浸水時間は九月頃ならば四―五時間、十月頃ならば六―七時間なり、即ち、気温の高低によりて浸水時間を伸縮するを要す

第四圖

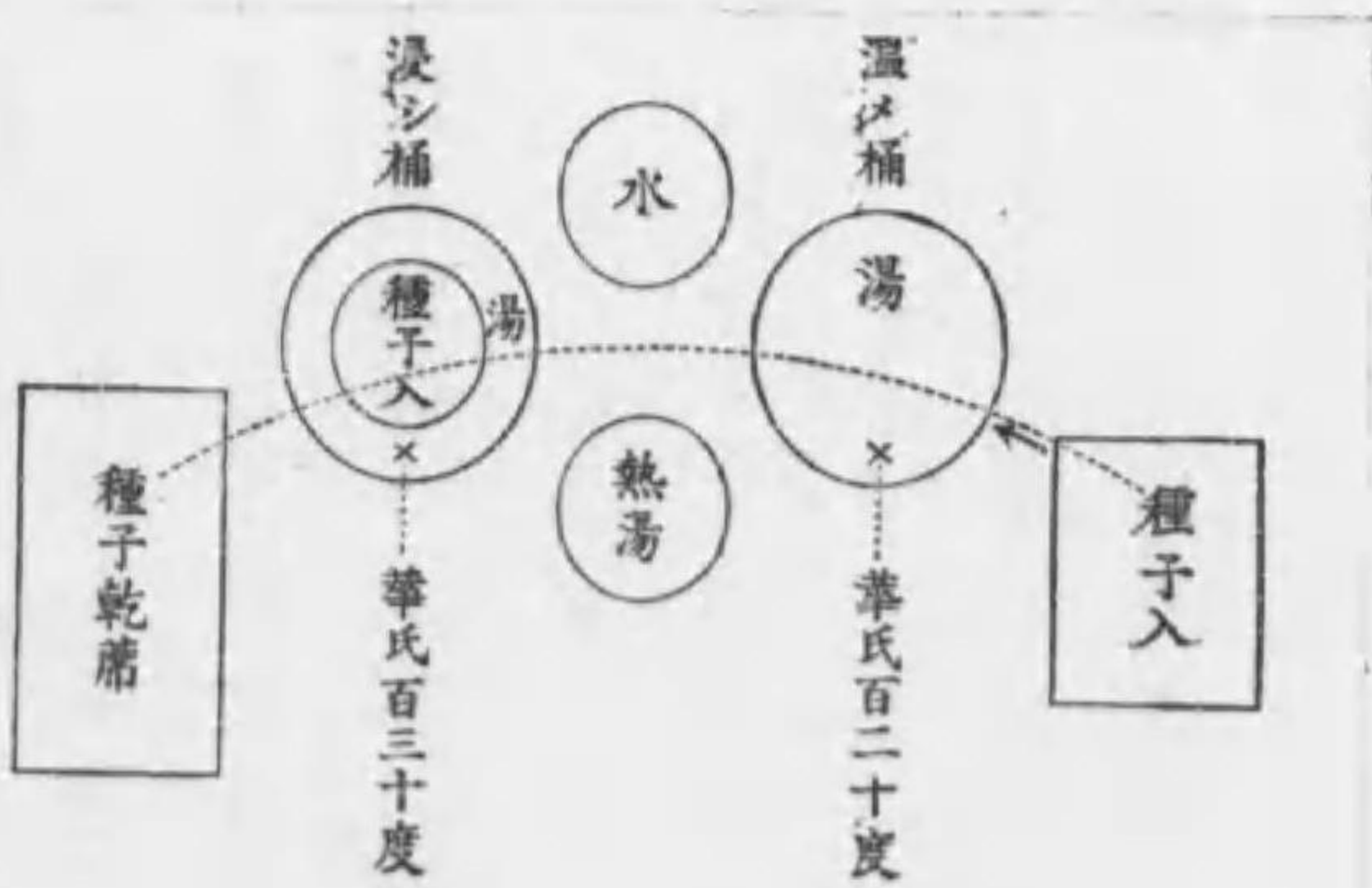
冷水温湯浸法の手續を示す。
温湯浸法の手續
一、温め桶は最初種子を温むるために必要なり。
二、水と熱湯とは浸したる種子を要し、桶に種子を加減するに必要なり。
三、種子入取をばし、桶より取出し、入れて、種子上に乾すべし。

種 類	選種液の比重
普通大麥	一、一〇―一、一三
裸 麥	一、二〇―一、二二

摘 要

水一斗に食鹽三四升を入れる
苦鹽汁に一割内外の水を加ふ

●黒穂豫防法 選種せる種子を採り、四時間乃至七時間冷水に浸したる後、華氏百二十度許の温湯に二三分間浸して、温め、更に華氏百三十度(二度以内の昇降あるも差支なし)の温湯に五分間浸漬(浸漬中絶えず攪拌す)したる後之を冷水に浸して速かに冷却し、次に席に擴げて陽乾すべし。又黒穂と共に斑葉病の發生を絶對に豫防せんとせば、浸し桶の中へ石灰硫黄合劑の適量を加へて用ふべし。



七 整 地

大麥は通常夏作たる陸稻・甘藷・大豆・蔬菜等の後作とし、又は水田の裏作とするものなれば、此等作物收穫の後、整地するものとする。整地には成るべく深く耕し、土塊を細碎するを要す。深耕の利益は左の如し。

- (イ) 土壤を深く膨軟にする故、根を深き所まで蔓延せしむ。
- (ロ) 土壤の容積を擴大する故、作物の支持力、養分の吸収力、保蓄力等を増大す。換言すれば、作物根竝に肥料を收容すべき倉庫を擴張することとなる。
- (ハ) 土壤の保水力を増すのみならず、空氣・陽熱及び水分の透通良好、肥料分の分解良好となる。
- (ニ) 肥料分は廣域に吸収保蓄せられ、徐々に分解して根に供給せらる。

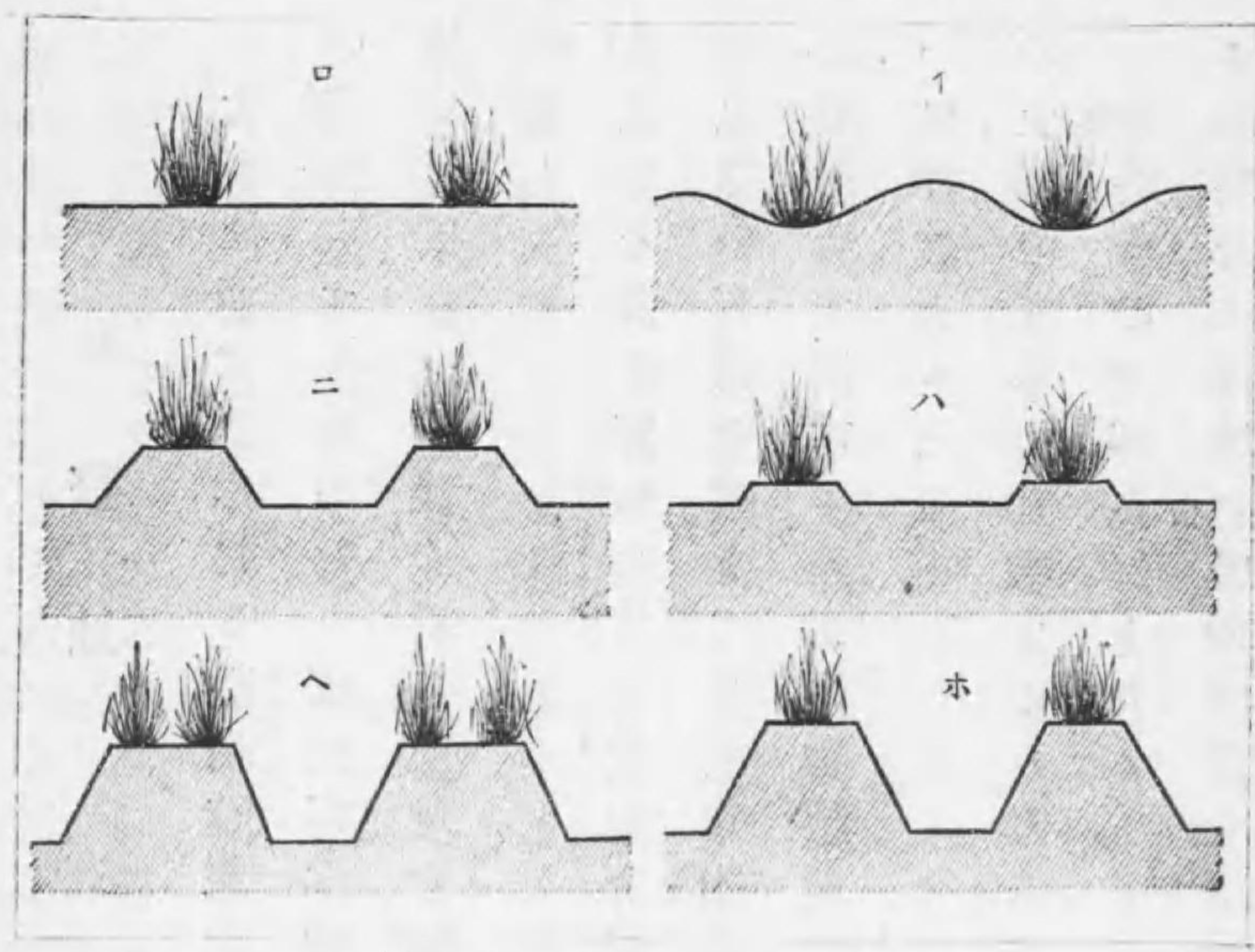
整地

二

●空氣の流通宜しければ、根の呼吸生育盛となる。
●陽熱土中に入り、地温高まれば、根の發育良好となる。
●分解せられたる肥料分は、根に吸収利用せらる。

第五圖

畦の高低を示す
 イ、深き溝に下種せるもの。
 ロ、浅き溝に下種せるもの。
 ハ、地平面に下種せるもの。
 ニ、地上数寸の高さに下種せるもの。
 ホ、へ、地上一尺内外の高畦に下種せるもの。



る、故に作物出来過ぎの虞
 少く、且肥料分流失の憂少し。
 (ホ) 以上の原因により、根の生育
 良好となり、従て莖稈の發育
 も宜しく、且倒伏の憂少し。
 (へ) 收穫物の品質良好にして、收
 量多し。
 之を要するに深耕は多肥多收
 穫の基礎たる必須の行事なり、
 殊に畑の夏作の整地にては深
 耕は不可能のことなれば、麥作
 前充分深耕するの要あり、耕起
 は人力による場合には、鋤鑿鋤

第六圖

整地用農具
 一、普通鋤
 二、金鋤
 三、唐鋤
 四、備中鋤
 五、江州鋤
 六、京鋤
 七、鑄鋤

六ツ子或はツアテコ
 ハシとも云ふ。
 畦巾三尺乃至六尺の
 高畦となし畦の高さ
 を三、四寸乃至七、
 八寸とし畦面に縦又
 は横に條を作りて播
 種す。
 埼玉縣の權田式は平
 畦にして畦巾二尺五
 寸前後なり。
 概れ平畦・中段畦・高
 畦・大高畦の四種に
 大別し土地の乾濕に
 よりて畦の高低を定
 む。

備中鋤又は

萬能の類を

用ひ、畜力に

よる場合には邦犁或は洋

犁を用ふ耕起したる後は

鋤・コマザラエ・馬耙・振馬耙等を用

ひて土塊を粉碎し、更に地面を平

に均し畦を立つべし。畦は排水

不良なる水田にては高畦となす

ことあれども、畑地及乾田にては

平畦となす。畦幅は通常一尺八寸乃至三尺にして二尺前後のも

の最廣く行はるれども、香川縣の吉田式廣播法にては畦巾三尺以

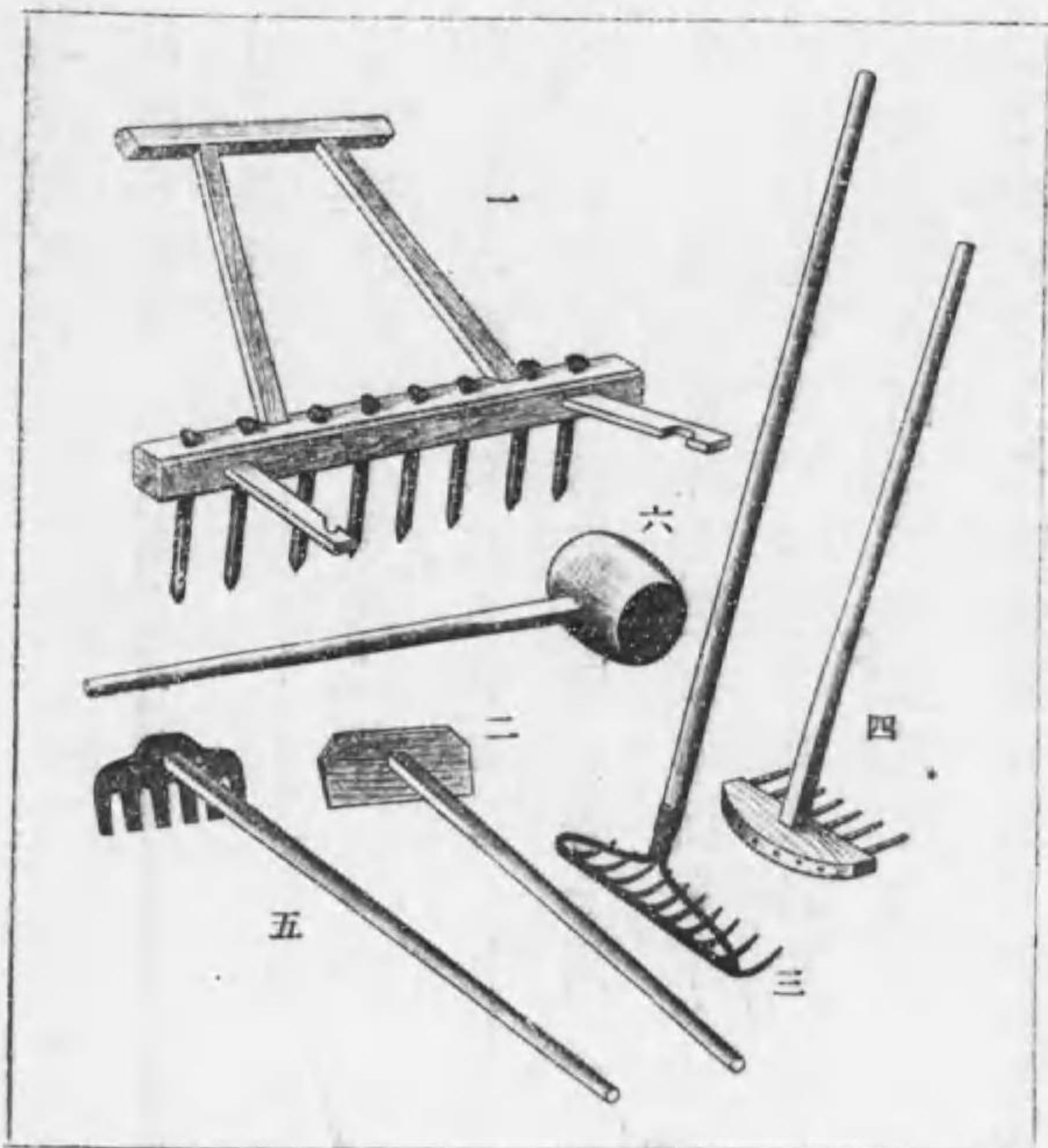
上のもの多くその廣きは九尺に及ぶものあり。抑々畦幅はなる



第七圖

整地用農具

- 一、馬肥
 - 二、モテリ
 - 三、レキ
 - 四、こまざらえ
 - 五、金ざらひ
 - 六、くれわり
- 夏作の蔬菜類の中には廣播麥の後作に適するものあり。

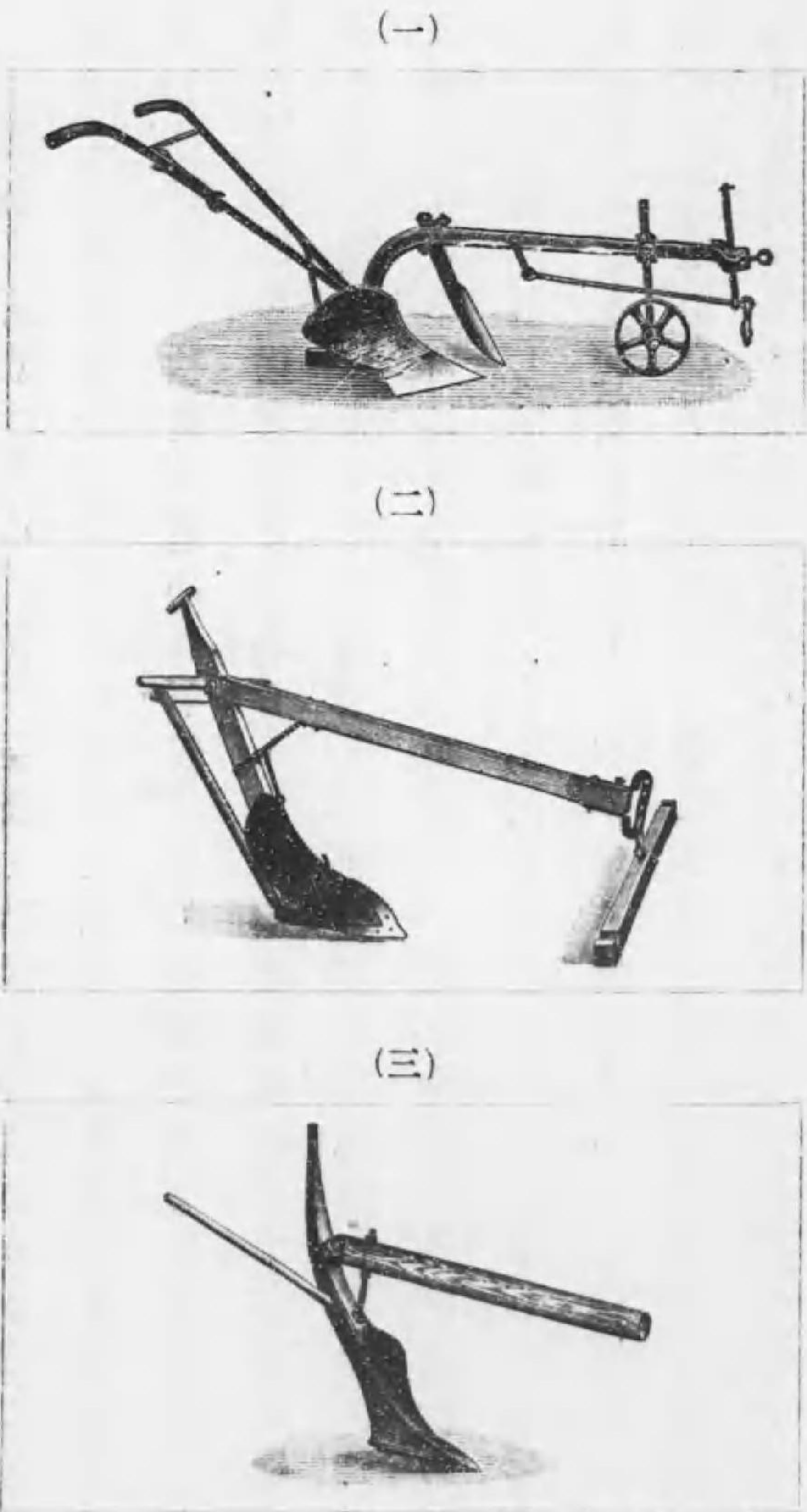


べく廣くして其の播巾を廣くすることは麥作改良上極めて必要なることなり。而して水田の裏作にては之を何程にても廣くすることを得れども、畑作に於ては實行の困難なる憾あり。何となれば畑にては麥の後作として陸稻・大豆・甘藷等の如き、麥よりも一層重要なる作物を麥の畦間に播付く關係上、夏作を犠牲として迄も廣播法を採用すること不可能なればなり。平畦の場合の播溝の幅は普通三寸乃至五寸なれども、廣きは一尺に達するもの

第八圖

- 一、西洋犁
- 二、松山犁
- 三、肥後犁

●權田式にては播溝の深さを四寸位とし溝の底幅を六寸位とす。



あり、又播溝の深さは淺きは一二寸にして、深きは四五寸に達す。畦の方向は單に麥作の爲のみを計らば東西にて可なれども、夏作の爲を顧慮するならば南北となすを可とす。蓋夏作に於ては東西

の畦よりも南北の畦の方作物の受光量多きを以てなり。

八 播種

① 四月下旬乃至四月上旬に播種す。

② 寒地は暖地よりも早播とす。

③ 軽き土壤は重き土壤よりも早播とす。

④ 裸麥は皮麥よりも稍早く播き、外國種は内國種よりも早播とす。

⑤ 土入を多く行ふ改良麥作法は稍早播とす。

播種期 歐洲にては大麥に春播と秋播との別あり、本邦にても北海道は概ね春播とすれども、我が内地にては秋播とせざれば好果を得難し。秋播の適期は氣候土質品種栽培法等によりて一様ならざれども、播種早きに失せんか、冬期莖葉徒長して寒害に罹り易く、若し晩きに失せんか根張り不充分なれば、他日に於ける莖葉の充分なる發育は得て期すべからず。加之、晩播は冬間霜柱のため根株浮上し、寒氣のために枯損することあり。されば早播の害に罹らざる範圍に於て、成るべく早く播種すべし。蓋冬間は氣温に比し地温高きものなれば、麥は冬間土中にて充分根を蔓延し、他日春暖の期に際して、完全に葉莖を繁茂せしむべき基礎を造る

ものなれば、根を完全に發育せしむるに足るべき適當なる時期に於て播種すること肝要なり。古語に「千駄の肥料よりも一夜の句」と謂へるは味ふべきことなり。

附近に於ける皮麥の播種の適期は 月 旬乃至 月 旬 なり。尙各地に於ける播種期を擧ぐれば次の如し。

① 寒地は暖地よりも厚播とす。

② 輕き土壤は重き土壤よりも厚播とす。

③ 分蘖多き品種は薄播とし之に反する品種は厚播とす又裸麥は皮表よりも二割位種量を減じて可なり。

④ 早播ならば分蘖多き故に薄播とし、之に反する場合は厚播とす。

青森地方	九月下旬—十月上旬	金澤地方	十月上旬—中旬
東京及 名古屋地方	十月下旬—十一月上旬	大阪地方	十一月上旬—中旬
出雲地方	十月下旬—十一月上旬	廣島地方	十一月中旬—下旬
松山地方	十一月下旬—十二月上旬	熊本地方	十二月上旬—中旬

播種量 播種量も亦氣候土質品種栽培法等によりて一様ならず、播種厚きに失する時は根は多く蔓延して養料に不足を生じ、莖葉は鬱閉して日光及空氣の透通宜しからざるため、細長軟弱となりて倒れ易く、且病蟲害に罹り易く、隨て收量の多きを期すべから

ず。之に反して薄きに過ぎんか、土壤及び空間を無駄に費し、根少
 き故に冬間寒害に罹り易く、又健全なる莖は分蘗度を過ごして出
 穂開花も不揃となり、子實の品質不良且收量少きものなり、されば
 種子の適量を用ふること肝要なり。我が邦に於て精選せる皮麥
 を適當なる時期に播種する場合には、一段歩當種子量四升内外を
 以て適當とすれども、早播の場合には三升乃至三升五合にて足る
 べく、晩播の場合には五升以上を播種せざるべからず。

① 摘播の株間の距離は
一尺内外とす。

② 播溝内へ一條に點播
する場合と二條に點
播する場合とあり。

播種式 播種の方式には條播、摘播、點播の三種あり、何れの方式
 によるべきかは氣候、土質及栽培法によりて定めざるべからず。
 即ち土質輕鬆にして寒氣強く、冬期寒風の爲めに根部露出して凍
 害を受くる虞ある場合には摘播となし、根の共同團結によりて寒
 害を豫防するの要あるべし。又採種圃の如きは混淆せる異品種
 或は變種を除去するの便を計りて、是非とも一粒播(點播)とせざる

べからず。然れども一般に廣く採用せらるゝは條播なり。

播幅 播幅を廣くする時は、發芽後各莖の占有すべき地積及び
 空間を多くし、日光と空氣と肥料との供給潤澤なれば麥の發育完
 全なるべき筈なり。されば播幅は畦幅の廣狹に係はらず、成るべ
 く廣くするを可とす。此の理を最よく應用したるものは吉田式
 廣播法にして、其播幅は二尺より六尺に達するものあり、されど此
 法の畑地に適用する能はざることは既に述べたるが如し。され
 ば畑に於ける普通の麥作としては二尺乃至二尺五寸の畦幅に於
 て、四寸乃至六寸の播幅となすを得策とすべし。

覆土及び鎮壓 種子を播きたる上に覆ふべき土の厚さは氣候、
 土質、播種期等によりて一樣ならざれども、若し覆土厚きに失せん
 か、發芽困難なるのみならず、發芽後地表に近き所に冠根を再生す
 るゆゑ、養分を徒費し發育を遅延せしむるに至る。之に反して淺

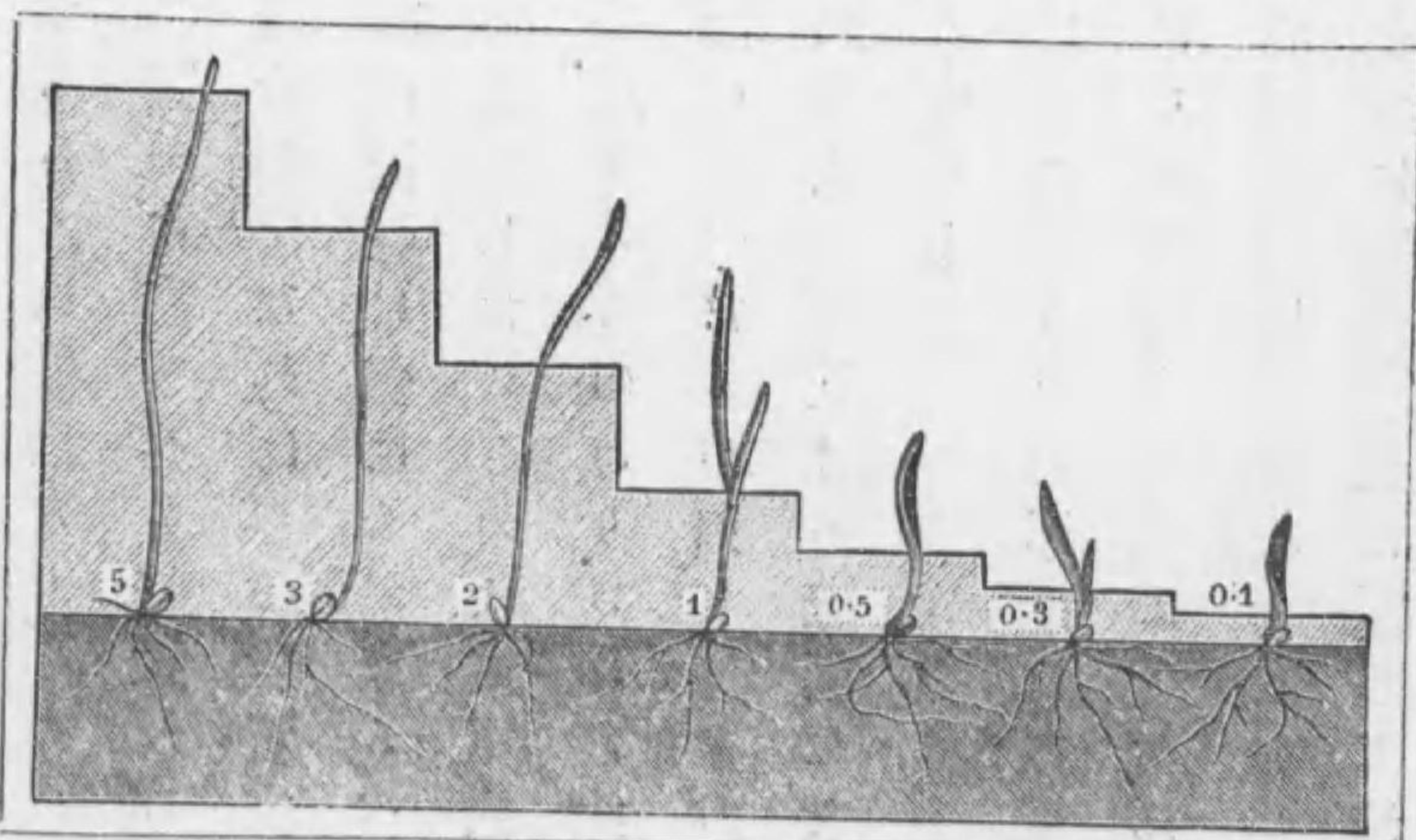
③ 氣候溫暖なる時は薄
く、寒冷なる時は厚
くす。
④ 輕き土壤は厚く重き
土壤は薄くす。
⑤ 播種期早ければ薄く
晚ければ厚くす。

第九圖
覆土と大麥の發芽
圖中の數字は土の
厚さを寸にて示す

●基肥と種子とを水又は薄き下肥にて捏ねて垂れ播とすることあり、斯の如くして施す肥料を種肥又は肌肥と稱す。

きに過ぎんか、根は乾き易く、又寒害に罹り易きを以て發育に妨げなきを得ざるなり。されば覆土は適度を誤らざることを肝要なり。東京附近に於ける覆土の厚さは五分乃至一寸とす。次に覆土したる上をば、足又は鋤を以て鎮壓するを可とすれども、若し土壤過濕なる時は反て之を行はざるを良とす。

播種の順序 播種には種々の順序あり、左に其大要を述べん。
一、●基肥の全部を種子と混合して播溝内へ播く法。



●根肥と稱し發芽後幼根によりて直ちに吸収せらる。

二、基肥を播溝内へ施し其の上に播種する法。
三、基肥を施したる上へ薄く間土を被ひて其の上に播種する法。
四、前項と同様間土を被ひたる上へ下肥の如き速効なる液肥を施したる後播種する法。
五、初めに種子を播下したる上へ基肥を施す法。
今前記各法に就きて其の得失を考ふるに、第一の方法は播種に要する勞力を節約するの利あり、各地に廣く行はるれども、種子の深度一定せざれば發芽不揃なるの缺點あり。又第一法と第二法とは種子と肥料と直接するが故に、肥料の醱酵によりて麥の幼根を害するの虞なしとせず。然るに第三法は肥料と種子との間へ間土を入るゝが故にこの憂なし。更に第四法に至りては、勞力を最も多く要する不利あれども、種子の下に速効肥料あるを以て發芽後幼根は直ちに之を吸収して發育旺盛となるの利あり、最良法なり

● 輕鬆土、濕地等にて此法による時は麥の根の寒害にかゝるを防ぐことを得。

● 播幅五寸乃至一尺の時、播方は種子をもちたる手を播溝の左側と右側とに各一回づつ都合一ヶ所に二回づつ手を動かして播きつゝ前進すべし播幅更に廣ければ一ヶ所に何回も手を動かして播くべし。

● 前作物の畦間廣き場合は播付くも差支なし。

と謂ふべし。尙第五法に至りては最も誤れる方法なるが如きも、輕鬆なる土壤若くは濕地に於ては強ち棄つべきにあらず。尙理想的播種法の手續を述べんに、先づ初め鍬、撞木等を用ひて、播溝の底を播幅位の幅に平に均し、其の溝底へ基肥を平に施し、其の上に間土を五分許かけ、其の上を鍬にて播幅だけに平に押し均し、此處に下肥、硫酸アンモニヤの如き窒素質速効肥料を施し、其の上に種子を規定の播幅に厚薄なく播き、鍬又は土入鋤簾を用ひてこれに土を覆ひ、次で其上を鎮壓するものとす。彼の權田式麥作法はこれに似たる順序方法によりて播種するものなり。

九 移植

大麥の栽培は直播するを常とすれども、畑地の秋作たる菘類、菜菔類等の後作として大麥を栽培せんとせば、此等作物の畦間に播

● 晚播せるものは莖は細く短かく、穂も子實も小にして收量少し。

付くるか、或は此等作物の收穫後に播種せざるべからず。若前法による時は、適當なる時期に播付くるを得れども、麥の發芽後は前作物の莖葉の爲に、日光を遮られ、空氣の流通不十分なるを以て、麥は軟弱に伸長し、前作物收穫後は急激に寒氣に曝さるゝを以て、著しく衰弱し到底健全なる發育を遂ぐるを得ず。若し後法によらんか、播種の期節晩きに失するを以て發芽に多くの時日を要し、莖葉の發育充分ならざるに既に出穂期となり、不完全なる穂を抽出するを以て、是又好果を擧ぐるを得ず。然るに斯かる場合に於て豫め仕立て置きたる苗の移植を行ふ時は次に示す如き利益あり。

(イ) 前作物收穫後仕事の都合を計りて漸次植付くるを得るを以て、秋期に於ける農事の繁忙を緩和す。

(ロ) 移植したる大麥の生育狀況は、適期に播付けたるものと大差なく、出穂成熟等齊一にして、子實の品質良好なり。

●苗圃は幅四五尺長さ適宜の床となし床上に坪一合位の割合に播種するものとす。

●四國九州等にては一月に入りて植付くも可なり。
●一株四五本とし株間四寸内外に二列植とするも可なれども勞力を多く要する損あり。
●西ヶ原農事試験場に於ける移植試験の成績左の如し。
●普通播種(十一月一日播種)十一月廿五日
●一月三日播種(十一月廿一日播種)十一月廿五日
●一月五日播種(十一月廿三日播種)十一月廿五日
●一月七日播種(十一月廿五日播種)十一月廿五日
●一月九日播種(十一月廿七日播種)十一月廿五日
●一月十一日播種(十一月廿九日播種)十一月廿五日
●一月十三日播種(十二月一日播種)十二月一日

(ハ) 收量も亦適期に播種したるものと大差なし。

移植を行ふに要する苗は苗圃を設けて養成するを可とすれども、簡便の方法としては、普通に播付けたる大麥の畦間に點々摘播し置き苗とするも可なり。而して苗の播付時期は普通の麥作よりも約一週間位早播とするを良とす。蓋早播する時は根の發育良好なる爲、移植による苗の損傷少きを以てなり。移植の時期は前作物收穫後成るべく早きを可とす。關東地方にては晚くとも、十二月下旬までに移植するを要す。移植晚きに失すれば、根の發育不良にして晚播と同様の不利あり。植付くべき畑地の整地は普通の麥作と同様に可なり。植付の方法は一株十本内外とし、株間を五寸位として條溝内へ一列に植付くべく、植付の深さは苗の時より稍深くするを度となすべし。尙植付の際はよく根邊の土壤を鎮壓し置くべし。植付後の管理は普通麥作に準じて可なり。

10 肥料

肥料の種類は氣候土質栽培法及び肥効と其の價格との割合に鑑みて定むべきも、堆肥、厩肥、下肥、大豆粕、菜種油粕、米糠、蛹粕、魚類搾粕、硫酸アンモニヤ、磷酸アンモニヤ、過磷酸石灰、骨粉、硫酸加里、草木灰等の中、最經濟的にして、且つ得易きものを適當に配合して用ふべし。就中堆肥、厩肥、下肥の如きは土性を改良し、地力を増進する價值あり、而かも廉價なるものなれば成るべく此等を選ぶを可とす。窒素質肥料の施用多きに過ぐれば、麥の出來過ぎる處あるが故に、適宜磷酸及び加里肥料を併用すべし。石灰は有機質に富める土壤及び酸性土壤に適宜施す時は効驗著しきも、之を濫用すれば土質を惡變する處あり。凡そ肥料は麥の開花前に奏効ある様施用すること肝要なり、され

●最新の肥料にして米國より輸入せられ、磷酸と窒素とに富み最低廉なる肥料なり。

① 瘠地は多く肥沃地は少く用ふ。
 ② 暖地は寒地よりも多く用ふ。
 ③ 出来難き品種には多く施す。
 ④ 多收穫法にては多く施用す。

⑤ 下肥の半量は追肥とすれども他は全部基肥とす。

ば堆肥・厩肥の如き遲効性肥料及び油粕類の如き奏効中位の肥料は全部基肥とし、其の他の速効性肥料は追肥とするを可とす、但し窒素質速効肥料は流失の虞あるが故に、適當の時期を隔て、二三次に分施するを要す。
 施肥量は土質・氣候・品種及び栽培法等によりて一様ならざれども、施肥多きに過ぎんか莖倒伏して大なる損失を來すべく、少きに過ぎんか養分不足のため根及び莖葉の發育不完全にして充分なる効果を奏し難し、されば宜しく其の地力に應じ適量を施用することと肝要なり。今左に一段當施肥量の實例を示さん。

地方別	肥料名	施用量	三要素含量合計
仙臺地方 (第四紀新層沖積土)	堆肥	二二〇、〇〇〇 ^貫	窒素 二、六二六
	米糠肥	一〇、〇〇〇	磷酸 二、〇一六
	下肥	一五〇、〇〇〇	加里 二、四六五

① 下肥及過磷酸石灰は追肥とし他は全部基肥とす。

② 全部基肥とす。

③ 下肥の三分の二を追肥とし他は全部基肥とす。

關東地方 (第四紀古層腐植質土)	關東地方の 多收穫法の (火山灰質土)	東海道地方 (第四紀古層壤質 埴土)
堆肥 大豆粕肥 下肥 過磷酸石灰 糞肥	堆肥 大豆粕肥 蛹粕 過磷酸石灰 糞肥	堆肥 大豆粕肥 下肥 過磷酸石灰
二七〇、〇〇〇 一〇、〇〇〇 七二、〇〇〇 六、〇〇〇 八、〇〇〇	三五〇、〇〇〇 二八、〇〇〇 六、〇〇〇 九、〇〇〇 三九、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇 一四、〇〇〇 一〇〇、〇〇〇 二、〇〇〇
窒素 二、六七六 磷酸 二、〇七一 加里 二、〇六四	窒素 四、〇〇七 磷酸 三、二八一 加里 三、四八一	窒素 二、九八〇 磷酸 一、九七八 加里 一、九八〇

同前			堆肥と硫酸アンモニヤは追肥として他は基肥とす。			下肥は追肥とし他は基肥とす。			
四 國 地 方 (第四紀新層壤土)	堆 肥 大 豆 粕 下 肥 過 磷 酸 石 灰	二〇〇,〇〇〇 一〇,〇〇〇 一五〇,〇〇〇 二,〇〇〇	窒素 磷 酸 加 里	二,五〇五 一,一三五 一,九五五	四 國 地 方 多 收 穫 法 的 (同 上)	堆 肥 大 豆 粕 硫 酸 安 摩 尼 亞 精 過 磷 酸 石 灰 木 灰	三〇〇,〇〇〇 三〇,〇〇〇 五,七〇〇 八,七〇〇 一五,〇〇〇	窒素 磷 酸 加 里	四,九八〇 三,六二一 三,七二九
九 州 地 方 (第四紀古層埴土)	堆 肥 菜 種 油 粕 下 肥 骨 粉	三〇〇,〇〇〇 八,〇〇〇 二〇〇,〇〇〇 五,〇〇〇	窒素 磷 酸 加 里	三,一九四 二,三五〇 二,一四四					

二 管 理

過濕地の如きは中耕を行ふ能はざることあり。

最後の中耕(止作)を麥の穂孕期の頃行ふ。

暖地にては第三回の中耕を二月末頃行ひ第二回の中耕を省略するも可なり。

第三回中耕の後にコマザラエの如きものに土塊を掻き碎くを可とす。

中耕 はよく乾燥したる時を見計らひて行ふべし、中耕を行ふ時は土壤を膨軟にして、土中陽熱と空氣との透過を可良にし、随つて肥料の分解をよくし、根の發育を良好ならしむるの効あり。中耕は土入を行はざる麥作法にては四五回行へども、土入を相當に行ふ改良法にては二三回行へば可なり。即ち第一回は十二月中深く條間を耕して土を麥の北側若くは西側に寄せ所謂日向作となす、かくすれば冬期西北の風を防ぐのみならず、光線を多く受け、温暖なるを得て冬間に於ける麥の發育を良好ならしむ。第二回は一月末乃至二月初めに行ふものにして、其の方法は前回と同様に、單に前回切り上げたる土の崩れたるを更に切り上げて山形となすを目的とす。第三回は三月上旬にして、此の際は鋤を用ひずして備中鋤又は鑿鋤の如きものにて深く麥の畦間を耕し、土壤を軟らげて根の蔓延を盛ならしめ、兼て其の後に行ふべき土入

① 追肥の時期も氣候及麥の生育程度によりて一様ならず。
 ② 追肥晩きに失すれば野蟲の發生する場合多し。

③ 麥の鎮壓とも云ふ。
 ④ 莖節立ちて後踏まば莖を踏み折る害あり莖節の生ずる時期は氣候により品種によりて異なる。

⑤ 諺に「麥の頭と舅姑の居間は踏む程よい」と云へり。
 ⑥ 鼯鼠の起したる所を踏みて乾燥を防ぐ。

の作業を容易ならしむるものとす。

① 追肥 は肥料の條下にて述べたる事項に留意し、十二月より三月上旬頃までの間に於て土壤に適度の濕氣ある時に施すべし。
 ② 追肥晩きに失すれば麥に利用せられざるのみならず、反つて麥の稔實を妨ぐる不利あり。昔より「彼岸過ぎての麥の肥と三十過ぎの親の意見とはきかぬ」と云へるは味ふべし。

③ 麥踏 は麥の發芽後より二月下旬乃至三月上旬迄に行ふものにして、最後の麥踏は麥の莖節の生ずるまでに止むべし。麥踏の效能を列舉せば次の如し。

- ④ 冬期霜柱の爲めに根の押し上げられて、寒害に罹るを防ぐ。
- ⑤ 根の乾燥を防ぎ、兼て根邊の土砂の飛散するを防ぐ。
- ⑥ 莖葉の徒長を抑制し、分蘖を多くし、根の蔓延を旺ならしめ、又莖を踏み擴げて空氣及日光の透過を好くす。

① 濕潤なる時行はゞ土壤を踏み固めて根の發育を害す。
 ② 露ある時行はゞ莖葉を踏み折る害あり。
 ③ 凍結せる時行はゞ麥の莖葉に傷害を與ふるのみならず、土壤を鎮壓するを得ず。
 ④ 寒地にては多く行ふ。
 ⑤ 輕鬆なる土壤にては多く行ふ。
 ⑥ 土入を多く行ふ場合には土入後に行ふ故回数増加す。
 ⑦ 莖軟弱細長なれば出穂早く、穂小さく、子實も亦小なり。

(ニ) 以上の理によりて莖は短大強硬となる。

(ホ) 出穂齊一となり、穂及び子實の大なるものを産す。

猶麥踏を行ふには左記事項に注意する要あり。

① 麥踏は土壤の乾燥せる時を見計らひて行ふこと。

② 朝夕莖葉に露ある時は行はざること。

③ 土壤及び麥の莖葉の凍結せる時は行はざること。

④ 麥踏の回数は何回位を適當とすべきかは氣候・土質並に栽培法の如何によりて一様ならざれども三回乃至五回にて足るべし。

⑤ 土入 從來舊式の麥作法にては、中耕のみを何回も行ひて、麥の莖を畦の前後より壓迫して中央に集合せしむるを以て、莖間に於ける空氣及び日光の透過を不良ならしめ、莖は軟弱細長となり、病害に侵され易く、從ひて穂の發育も不良なれば收量の多きを期すべからず。然るに中耕の回数を減じて適宜土入を行ふ時は、上述

第九圖

麥の土入鋤簾
甲は軟かき土壤に
適し乙は硬き土壤
に適す。

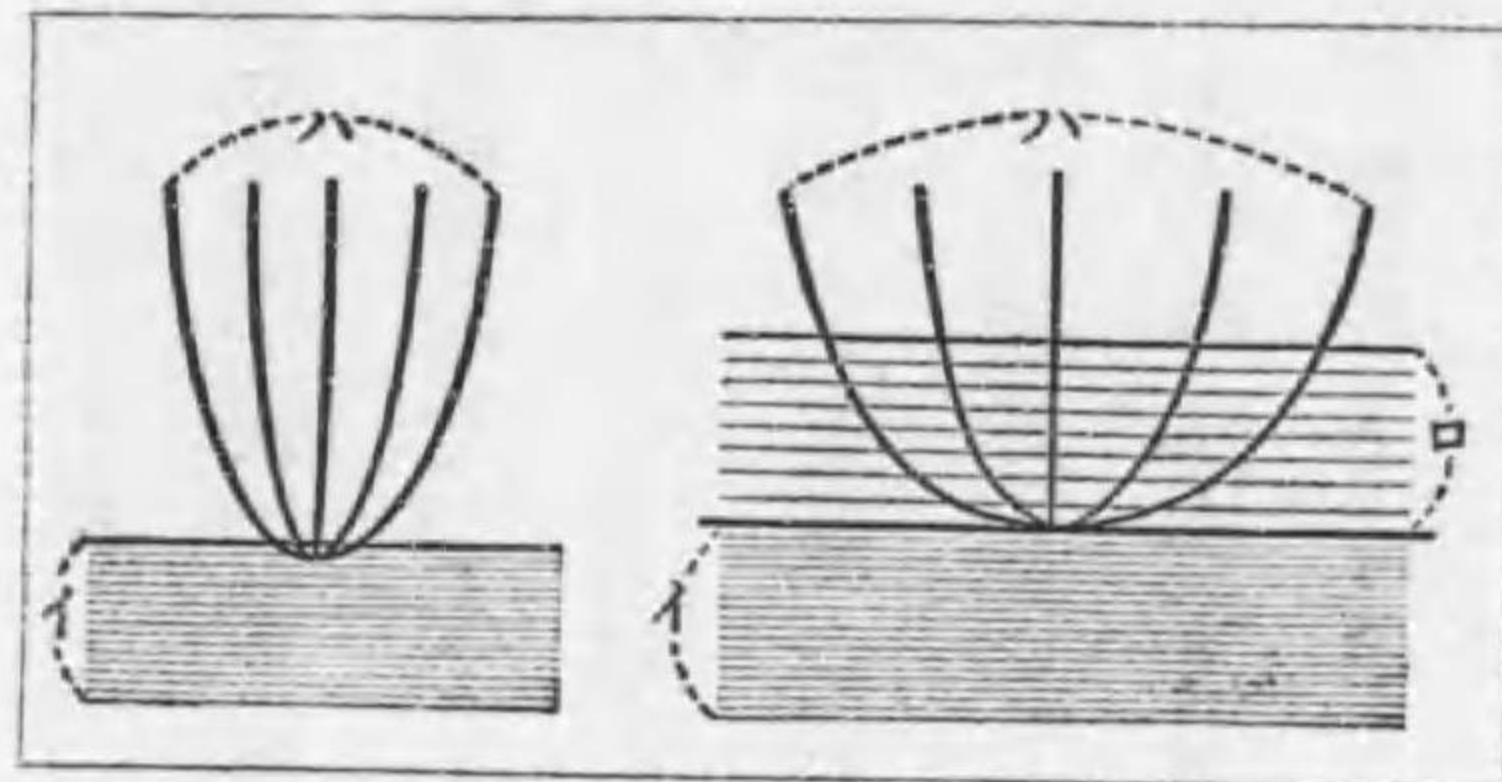
日光をよく利用せし
むることは同化作用
を盛ならしむる所以
にして多收穫の根本
なり。



の如き弊害なく次に列挙するが如
き利益あり。
(イ) 冬間の土入は根を保護して寒害
に罹るを豫防す。
(ロ) 其後の土入は株を四方に擴げて
空氣日光の透過を好くす。

第十圖

(イ)は麥の根の着
生する表土
(ロ)は土入器にて
振り込みたる土
(ハ)麥の莖の出方
を示す



(ハ) 莖葉の發育旺盛にして、強剛に育ち、随つて倒伏
の虞少なし。
(ニ) 無効分蘗を少くする故に莖の發育整一にして
出穂も亦一齊となる。
(ホ) 穂は大形となり、子實も亦重大となる。
(ヘ) 子實の品質優良となり、收量も増加す。
併し土入の効力は深耕して多量に施肥したる多

●氣候溫暖なる地方に
ては冬期行ふの要な
し。

收穫栽培法に於て最よく現はるゝことを忘るべからず。
土入は早春より穂孕期前までに二三回行ふを常とすれども、改良
法にては冬期より穂孕前までに六七回行ふものあり。振り込む
土の厚さは普通四五寸を度とすれども、改良法にては一尺前後に
達するものあり。尙土入の方法は土入鋤簾を以て畦間の土を掬
ひ、麥の莖間に振り込むを普通とすれども、改良法にては、冬期には

回数	時期	土の厚さ	土入器の種類
一回	播種後三十日目	三分位	竹箒
二回	同 六十日目	三分位	三分目土入鋤簾
三回	同 九十日目	四分位	同上
四回	三月上旬	一寸位	同上
五回	三月下旬	一寸五分位	六分目土入鋤簾
六回	四月上旬	二寸五分位	同上
七回	四月中旬	三寸五分位	同上

竹箒の如きも
のを用ふるこ
とあり。今茲
に改良麥作法
の一例として
權田式麥作法
の土入の方法

を示さん。

一二 病害

大麥の病害には黒穂病・斑葉病・葉澁病・立枯病等あり。

(イ) 大麥の黒穂病 本病に裸黒穂病及堅黒穂病の二種あり。

裸黒穂病 本病に罹りたる穂は暗褐色の粉末に變じ、初期には薄き皮膜

を被ひれども、熟するに従ひ皮膜は破れて黒粉を露出す。この黒粉風の

爲めに飛散して他の穂に附着し本病を蔓延せしむ。本病に侵されたる

株は全部黒穂となり全く結實するものなし。

本病豫防法は種

子に冷水温湯浸法

を行ふに在り。

堅黒穂病 本病

に罹りたる穂は堅

くして黒粉は容易

●黒粉の飛散し易きによりて名けらる。
●暗色粉末は本病菌の胞子なり。
●穂は初め白色の薄き外皮を被むる故にシロホの方言あり風雨に曝さるゝ時は外皮破れて堅き黒粉塊を露出す。

第十一圖

一、裸黒穂の被害穂及同病菌の胞子
二、堅黒穂の被害穂及同病菌の胞子



●イサハ病、シマス、キ病等と稱す。

第十二圖

健全なる株と、斑葉病の被害株



(ロ) 斑葉病 本病は大麥の草丈一尺餘に達したる頃より發病し、特に其の穂

に露出することなし。本病菌の胞子は風によりて散ずること極めて少く、脱粒の際粉砕されて種子の表面に附着し發病の原因をなす。本病に侵されたる株の穂は全部黒穂とならず、多くは一株中に無害穂を混ざるものとす。
本病豫防法は種子に温湯浸法を行ふにあり。

孕期に於て最も甚しきを見る、被害莖は初め縦に黄白色の條斑を生じ、恰も斑入の如き觀を呈す、此病斑は漸次褐色となり、遂に暗黒色に變ずるに至る。穂孕期に發病すれ

第十三圖

斑葉病菌
イ、孢子梗
ロ、胞子

① 温湯中に石灰硫黄合劑を加へ用ふれば更に有効なり、
② ウドンコ病とも云ふ。

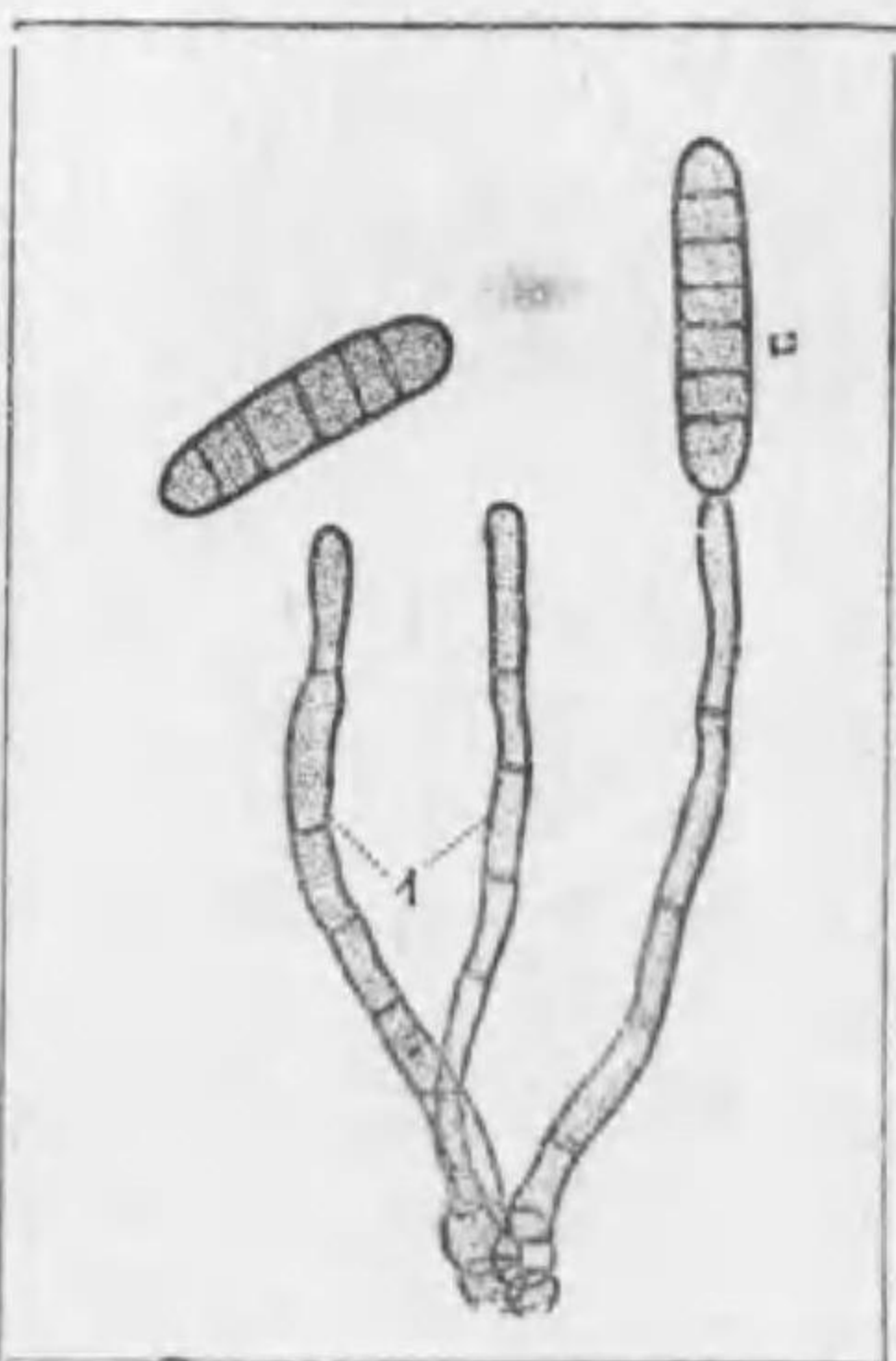
③ 熟期に於て被害莖の地際の黒色に變ぜるは本病菌絲の老熟せるものなり。

ば穂は抽出することなし。

本病菌は幼苗の組織中に潜伏して外部に現はれざるも、麥の成長に従ひ病徴を現はすものにして、一粒より生じたる株は全部の莖に發病するものとす。本病は「氣候」の濕潤なる場合及び播種の遅れたる場合等に發病の甚しきを觀る。

本病豫防法は種子に冷水温湯浸法を行ふに在り。

(ハ) 葉澁病 本病に赤澁病と白澁病とあり、各別種の病菌の寄生によりて、發病するものとす。此等の病害は氣候濕潤にして通氣の不十分なる場合、又は窒素質肥料過多にして莖葉徒長したる場合等に發生し易き故是等病因の除去に留意せざるべからず。



(ニ) 麥の立枯病 本病は普通三四月頃發生すること多く、被害莖葉は漸々黃色に變じ、甚しきは全株悉く腐朽することあり。本病は乾燥地に發生多く、又窒素質肥料過多の場合、及び播種期の早さに失したる場合等に發病

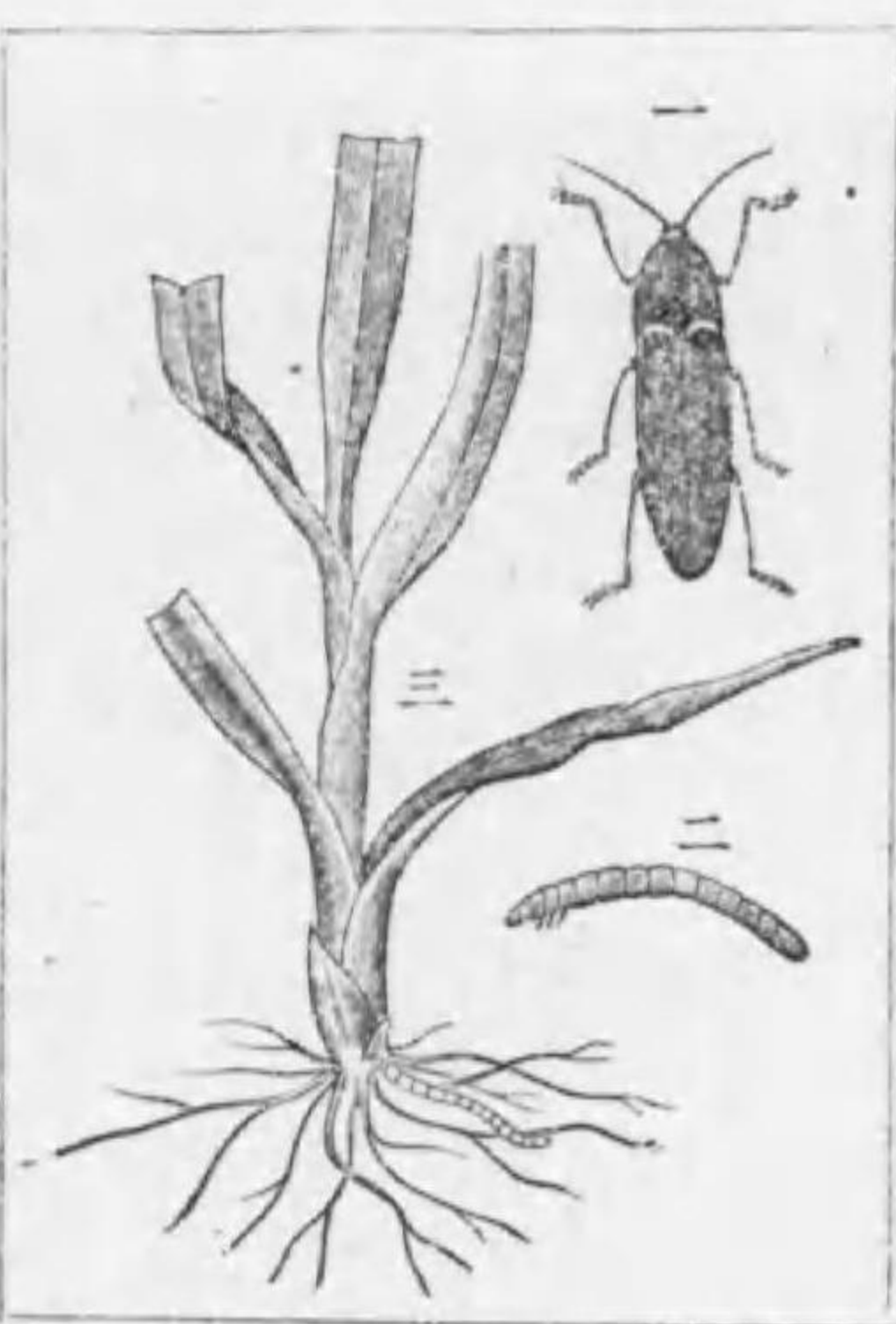
多きものとす。

本病豫防法は被害莖を燒却すること、肥料の配合、及び栽培法等に注意することなり。

一三 蟲害

大麥の害蟲にはハリガネムシ、麥蛾、蚜蟲等あり。

(イ)ハリガネムシ 叩頭蟲の幼蟲なり、成蟲は扁平なる黒褐色の小甲蟲なり。



幼蟲は黃褐色長形にして針金の如し。成蟲は貯穀中にありてこれを食害し、植物の根邊に産卵す、幼蟲は土中に住みて春期麥の莖根を害す。二三年間幼蟲態にて越年し、深く土中に入りて蛹化す。豫防驅除法 (イ) 未熟堆肥を多く用ふる時は發生多き故に注意すべし。 (ロ) 被害莖を抜き取りて幼蟲を殺すべく、成蟲も見當り次第捕殺すべし。 (ハ) 被害多き

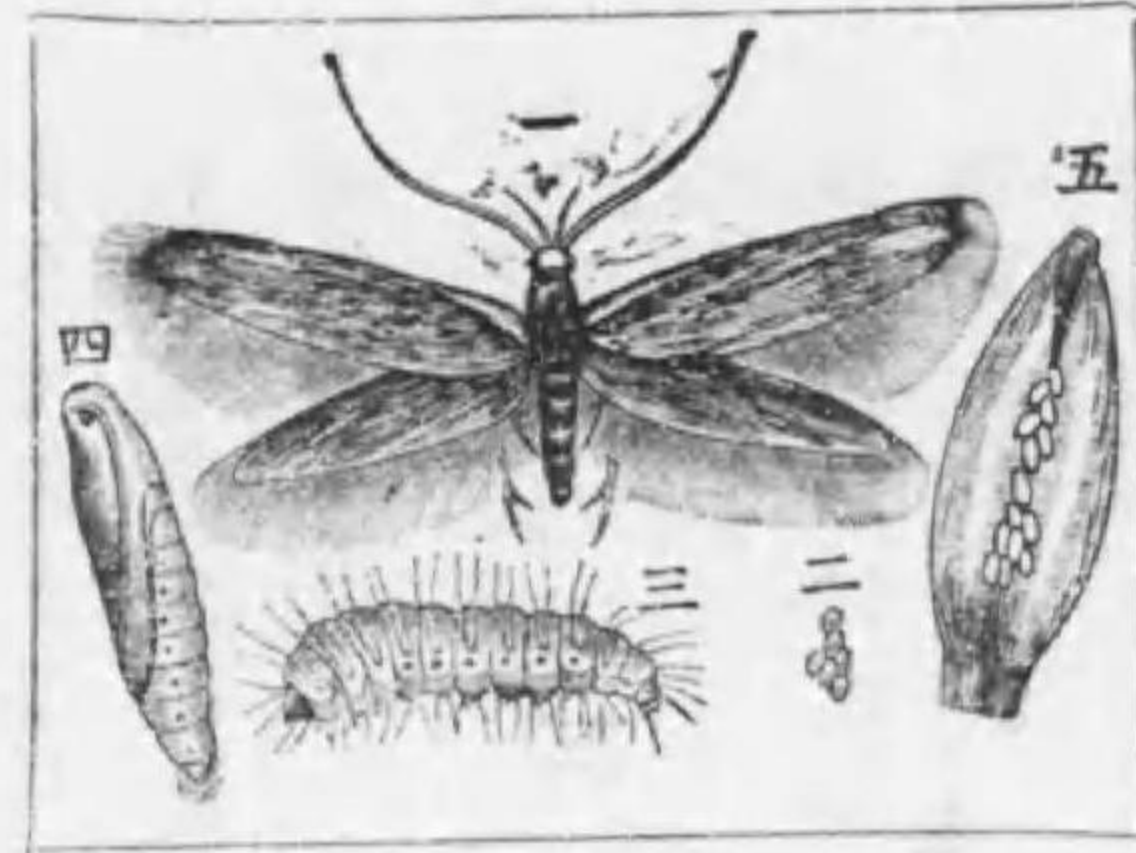
① ムギツキムシとも俗稱す。
② 成蟲體長二分五厘
③ 幼蟲老熟すれば體長一寸に達す。
④ 特に晩春に被害多し

第十四圖

ハリガネムシ
一、成蟲(叩頭蟲)
二、幼蟲(針金蟲)
三、被害莖

① ムギテフとも言ふ。
 ② 成虫體長二分五厘翅の開張五分
 ③ 體長四分内外

第十五圖
 一、蛾
 二、卵
 三、幼蟲
 四、蛹
 五、麥粒に卵の附着するもの



地方にては甘藷、馬鈴薯等を切斷して圃地の土中に埋め、又米糠を處々に埋め置き、幼蟲の誘殺を圖るべし。

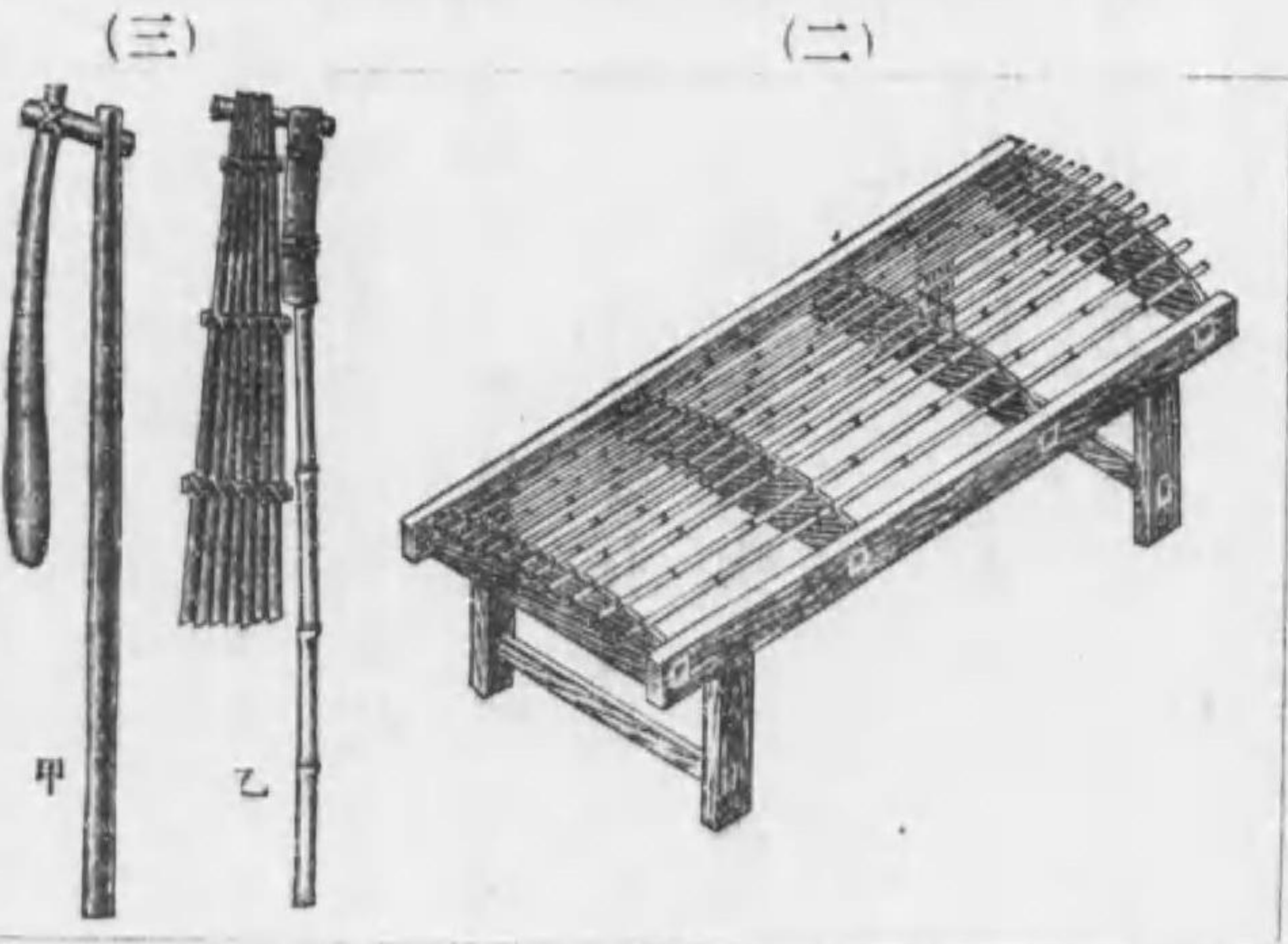
(ロ) 麥蛾 成蟲は暗褐色の小蛾なり。幼蟲は乳白色にして、老熟すれば黄褐色の蛹となる。一年二回の發生をなし、春期は五六月頃麥粒より出て圃場の麥に産卵し、第二回は七八月頃出て、貯藏中の麥に産卵す。共に直ちに孵化して麥粒に侵入す。豫防驅除法 (イ)刈取りたる麥を稈の儘長く放置する時は、被害多きものなれば成るべく早く打落すべし。(ロ)子實は夏期時々出して乾燥し幼蟲を殺すべし。(ハ)倉庫内にて二硫化炭素、クロールピクリン等の燻蒸を行ふべし。

(ハ) 麥の蚜虫 圃場内空氣の流通不良なる場合、若くは窒素質肥料過多にして、麥の開花後に至るも尙莖葉黄變する能はざる場合等には、此の害蟲の蕃殖を見るものなれば、是等の點に注意して其の發生を未然に防ぐこと肝要なり。

一四 收穫及調製

大麥は黄熟期に達せば刈取り、後熟せしめたる後調製するものと

第十六圖
 麥の調製用農具、
 一、脱穀機
 二、麥打臺
 三、連枷



● 麥稈を目的とする場合は普通よりも約一週間早く收穫す。

● 一俵の容量は五斗とするを普通とす。一升の重量は二百八十匁なり。

● 多收穫法にては反當皮麥十石以上收穫する者あり。

● 收穫の適期は麥の品種及氣候等によりて多小差異あれども、我が邦内地にては早きは五月上旬にして、晩きは七月中旬なり。刈取りたる麥は三四日間圃場に擴げて乾燥後熟せしむるを常とすれども、刈取期に降雨多きか、又は稻の植付、養蠶等にて繁忙なる場合等には、刈取りたるものを小束となし、麥架むぎかに懸け置きて乾燥するものとす。乾燥後は麥扱にて扱き落すか、又は麥打臺にて打落し、連枷にて打ち、篩にかけ、更に唐箕にて子實と夾雜物とを選別し、蓆に擴げて十分乾燥したる後俵装すべし。一段歩の收量は皮麥にては三石乃至六石のにして、裸麥にては二石乃至四石の範圍なり。近時多收穫法の研究盛なるに至り、段當收量も隨ひて追年増加するの趨勢すうせいいにあり。

小麥

一 小麥

小麥の原産地は亞細亞土耳其トルコにして、歐洲にては太古より栽培し、廣く各地に傳播はつぱしたるものゝ如し。本邦にては神代より存在し、稻大麥に次ぐ重要な食糧作物として栽培せられしが、殊に近年小麥粉の需要増大せる爲各地に小麥を原料とする製粉會社の設立せらるゝものありて、小麥作の前途は矚目しよくもくせらるゝに至れり。最近本邦に於ける小麥の作付段別並に收穫高は左の如し。

年次	作付段別	收穫高
大正八年	五四八、五〇七	六、三六〇、八四七 <small>石</small>
同 九年	五三〇、二〇七	五、八六五、六九一

世界の産額は約二億二千萬石にして産額の多きは北米合衆國、英領印度、露西亞、佛蘭西、伊太利、濠洲等なり。

同 十年

五一五、六〇二

五、五八二、二〇〇

小麥の産額の多きは茨城、福岡、兵庫、栃木、群馬、埼玉、岡山等の諸縣にして、大正十年度に於ける小麥の一段當平均收量は一石八升なり。

二 用途

● 歐米にては麵粉を常食となす我國にても近來是が需要頗に増加せり。

(一) 小麥は粉に挽きて饅頭、素麵等として常食となし、或は麵麩、饅頭菓子等を製す (二) 醬油、味噌、醋等の原料となし、或は糊にも用ひらる。 (三) 小麥麩は蛋白質に富み、家畜の飼料に適す。 又はより麩を製し、或は味噌の原料に供す。 (四) 小麥稈は大麥稈に比し腐敗し難きを以て、家根を葺くに宜しく、又敷藁、肥料、燃料等とし、或は薦、蓆等を製す。 稈は主に肥料とす。

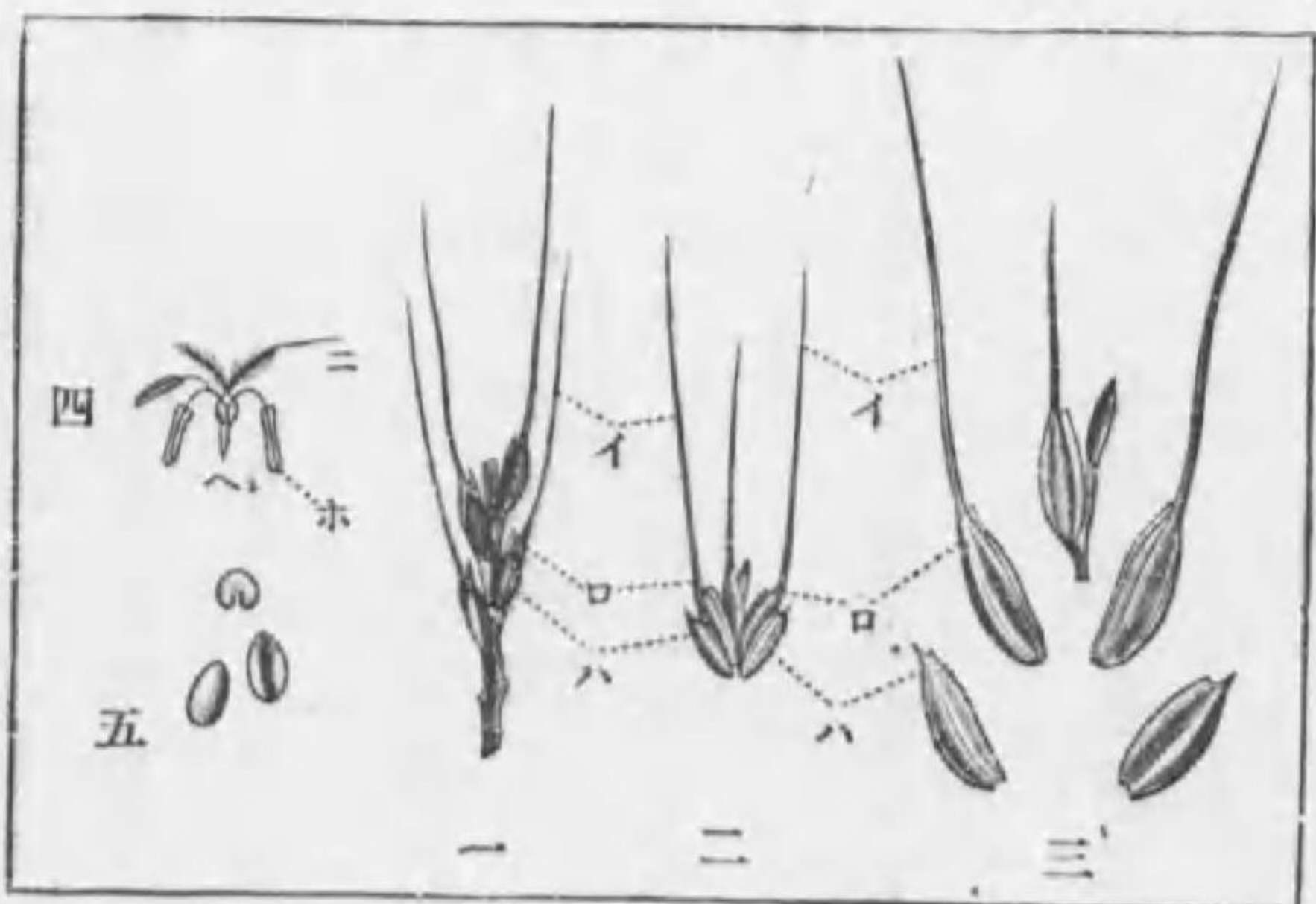
三 性狀及び分類

第十七圖

小麥の穂の一部
一、穂の一部の側面
二、小穂の正面
三、花の外部
四、花の内部
五、子實
イ、芒
ロ、穎
ハ、護穎
ニ、柱頭
ホ、雄蕊
ヘ、鱗被

莖は大麥に比すれば細けれども剛性に富み、根は大麥よりも長く、葉は狭長にして垂下する傾あり。 各小穂には二花乃至五花集合し、護穎を以て保護せらる、各小穂の一花乃至數花は子實を生ぜざるを常とし、一小穂は三個以上の子實を生ずることなし。

小麥も芒の有無、熟期の早晚等によりて區別すれども、一般には子實の色によりて赤小麥と白小麥とに分類せり。 白色種は一般に其の粉の品質上等なれども、赤色種の粉は品質下等なり。 我が邦の在來種は何れも赤色種に屬し、短稈早熟にして、子實は蛋白質に富み、粘氣強きを以て麵類の製造に適す。



用途 性狀及び分類

●外國種の白小麥を我邦にて栽培すれば子實は漸次赤色に變じ品質惡變す。

●莖稈短くして強きときは畦間へ後作を播付くるに便なり。

●外國種にも白色種と赤色種とあれども、一般に長稈晩熟にして、子實は澱粉の含量多くして粘氣少なく、麵麩の製造に適す。

四 品 種

我が邦にて栽培せらるゝ小麥の品種の主なるもの左の如し。

●關取 關東地方に廣く栽培せらるゝ早生中芒種なり。莖稈短くして強く分蘖多く、子實の品質宜しく、收量多し。

●赤坊主 關東地方に多く栽培せらるゝ早生無芒種にして、莖稈短くして強く、分蘖多く、子實の品質中等にして收量多し。

●相州 關東より關西に亘りて廣く各地に栽培せらるゝ早生中芒種にして、莖稈大ならず、子實の品質中等にして收量多し。

●金比羅 四國・中國地方に多く栽培せらるゝ早生短芒種にして、莖稈大ならず、子實の品質中等にして收量多し。

●だるま 廣く各地に栽培せらるゝ中生中芒種なり。莖稈短くして強く分蘖力強く、子實の品質上等にして收量多し。

●白坊主 各地に栽培せらるゝ中生無芒種なり。莖稈短くして強く、子實の品質中等なれども收量多し。

●莖稈長大なれば後作の播付(作入れ)に不便なり。

●柳窪 關西地方に栽培せらるゝ中生の無芒種なり、莖稈長大にして強かず、子實の品質中等にして收量多し。

●江島 中國地方に栽培せらるゝ晩生無芒種なり、莖稈長大なれども強く、分蘖多く、子實の品質優良にして收量頗る多し。

五 氣候土質

小麥に適する氣候は大麥と大差なけれども、寒氣に堪ゆる力は著しく大麥に勝れり。一般に我が國の如き溫暖多濕の氣候にては子實小粒にして、品質不良のものを産すれども溫暖乾燥の氣候にては表皮薄く充實、肥大せる良品を産す。而して成熟期に於ける降雨の害は大麥に於けるよりも著しきものとす。

●粘氣多く内容硝子質のものを産す。

●粉狀質のものを産す。北滿州米國カリフォルニア産の小麥の如き是なり。

六 栽培法

小麥の栽培法は大麥の栽培と大同小異なるを以て、只大麥に比較して異なる點のみを述べべし。

●理由は後に肥料の條下に於て述べべし。

選種及麥奴豫防 裸麥に準じて可なり。

畦幅 小麥に於ては大麥に於けるが如き多肥多收穫は望むべからざる理由あり、随つて畦幅も大麥より稍狭くして可なり。

●皮麥を指す。

播種期 小麥は大麥に比すれば、生育日數長く、然かも我が邦六月下旬以後の氣候は小麥の生育に不適當なるを以て、なるべく播種期を早めて、其成熟を促進せしむるの必要あり。

播種量 小麥は大麥よりも小粒なるのみならず、播種期早く且發芽後の分蘗も多き故、播種量は大麥の三割位減じて可なり。

●小麥の莖は成熟期に達せば大麥よりも強剛となる。

肥料 小麥は大麥よりも長き根を有し、土中の養分を攝取する

力亦隨て大なれば、肥料は大麥より少量にて可なり。加之生育中の小麥の莖は大麥に比し軟弱にして撓屈し易きを以て、土入の効果は大麥に於けるが如く顯著ならず。されば多肥多收穫法は是を小麥に適用するも望少きものなれば、施肥量も亦少量ならざるを得ず。即ち小麥の施肥量は大麥より一、二割減じて可なり。

管理 大麥と大差なし。土入は二三回行へば可なり。其の回數を多くするも大麥に於けるが如き好果を望むべからず。

七 病蟲害

小麥の病蟲害の主なるもの左の如し。

●我が邦にては本病の被害は僅少なり。

小麥黑穗病 本病は其の外観大麥の裸黑穗病に酷似すれども、全く別種の病菌の寄生による。被害穗の外皮は速かに破れて黒粉を飛散す。一粒の種子より生じたる株は、健病兩稈を混ざるを常とす。本病菌寄生の方法は全く大麥の裸黑穗病菌と同様にして、豫防法亦是に同じ。

287
525

農藝新書目録

(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)		
土壌	水稲	接木と挿木	農家簿記	農家經濟	柿と栗	梨	西洋草花	養雞	養蠶	産業組合	大根燕青胡蘿	茄蕃茄草苜蓿	甘藷馬鈴薯	甜瓜越瓜西瓜	胡瓜南瓜西瓜	甘藍菘葱玉葱	下肥と堆肥	町村自治
(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)	(既刊)

(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)
柑橘	桃と葡萄	苹果と櫻桃	國家と農業	灌溉と排水	農舎と宅地
					田畑と山林
					廢物利用
					漬物
					味噌と醬油
					青刈大豆
					紫雲英苜蓿
					大豆小豆豌豆蠶豆
					剪定整枝
					麥
					土地測量
					肥料魚肥人造
					油粕肥料配合
					麥細工
					品種改良



大正十二年四月二十拾日印刷
 大正十二年四月二十拾日發行 (定價拾貳錢)

竹林造成
 杉と松
 茶
 大麻と苧麻
 菊と朝顔
 薔薇と牡丹
 驅蟲劑と殺菌劑
 牛と馬
 豚と山羊
 養蜂と養魚

不許複製

著作者 佐藤寛次
 印刷者 河出静一郎
 發行所 成美堂書店
 印刷所 三協印刷株式會社

東京市日本橋區通三丁目十番地
 東京市京橋區町二十五番地

本病の被害も小麦黒穂の如く多からず。

一俵の容量は四斗入とするを普通とす。一升の重量は三百七十五匁なり。

收穫調製

小麥腥黑穗病 本病の被害は單に子實の内部に止まり、外觀著しき異状を現はさず。豫防法は大麥堅黑穗に同じ。

小麥稈黑穗病 被害小麥は其の葉片及葉鞘に細長なる黒條を生じ、被害甚しき時は出穂すること稀なり。豫防法は小麥黒穗病に同じ。

虫害は大麥と異なることなし。

八 收穫調製

收穫調製の方法は大麥と同様なり。收穫期は大麥よりも一、二週間後るゝを常とすれども、小麥は其の子實極めて脱落し易きを以て收穫期を逸する時は風雨の爲に脱落して損失を招くこと尠からず。又其の取扱にも注意せざるべからず。小麥一段歩の收量は普通二石内外なれども多きは四石に達することあり。

終

